

〈研究報告〉

## A 県内陸部在住の所属施設を持たないベテラン看護職者が災害看護活動の場を開拓していくプロセスと活動を通しての思い

蘇武彩加, 三浦まゆみ, 蛸崎奈津子, 平野昭彦, 野口恭子, 田口美喜子, 渡辺幸枝  
岩手県立大学看護学部

### 要旨

本研究の目的は、組織を持たないベテラン看護職者が東日本大震災の被災地において、発災直後から今日までの災害看護活動の場を開拓していくプロセス、また、活動を通しての思いを明らかにすることである。方法は、所属施設を持たない看護職者で支援活動を行っている B 団体の 5 名にインタビューを行い、内容を分析した。分析の結果、試行錯誤のなかでも何か支援をしたいという気持ちを強く持ち、これまでのつながりを生かし、活動の糸口を見つけ、これまでの経験で培った力をさり気なく発揮した活動を行っていた。ベテラン看護職者が災害支援活動を展開することは、幅広い知識と技術、冷静で適切な状況判断などが可能になると考えられ、経験知を活かした活動、強みを活かした活動ができ、さらには被災地の風土を熟知した看護職者であったこともあり、被災者に寄り添う支援者として安心を与えることにつながったと示唆された。

キーワード：ベテラン看護師，災害看護活動，開拓，プロセス，思い

### はじめに

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、宮城県沖で発生したマグニチュード 9.0 の東日本大震災は A 県の沿岸地域にも甚大な被害をもたらした。その中で災害発生後の看護活動は、行政単位によるものや日本赤十字社、災害派遣医療チーム (DMAT)、日本看護協会の災害支援ナースなど、多職種との円滑な連携に基づき組織的な活動を展開し、その活動は数多く報告されている<sup>1)~5)</sup>。災害看護活動は、災害直後の急性期のみならず、被災した生活の建て直しを始め、その後の暮らしを支援することも必要で、中長期までを活動範囲とする<sup>6)</sup>。

A 県内における看護職者による被災直後の支援活動については、地元の病院、福祉施設など被災地で日頃から活動している看護職者が県内外の行政機関や看護職と共に実践し、一定の評価がされている。しかし、被災から一定期間が経過し復興期に入ると、支援活動は行政や各市町村の社会福祉協議会によるもの、NPO 団体などのボランティアによるものが主となり、看護職者による支援は十分とは言えない状況となっている。被災から一定期間が経過した中長期における被災地の人々の健康の保持増進や悪化予防のための支援は非常に重要であるものの、有職者にとって自

身の所属施設で通常業務を行いながら、被災地でボランティア活動に取り組むことには限界があり、活動の担い手が十分に確保できていない。また、既に退職で所属組織をもっていなかったり、内陸部在住で被災地に居住していないなど、いわゆる潜在看護職者の活動展開は一定期間、災害支援ナースとしての活動の道はあるものの長期に渡る効果的な支援活動が困難な現状にある。このような潜在看護職者は、比較的時間の制約が少なく、これまでの自身の経験をふまえて効果的な支援活動を展開できると考えられるが、行政や多職種など組織的に運営されている支援活動とどのようにつながりを持ち、活動を行うかが大きな課題となっている。そして、このような支援活動の機会を創出するプロセスに関する知見は、いまだ十分に研究されていない。

そこで、本研究では東日本大震災直後から今日まで、被災地での支援活動を試行錯誤しながら行っている A 県内の施設を退職した看護職者で結成されたボランティアグループの被災直後からの活動と災害看護活動の場を開拓していく具体的なプロセスを明らかにする。このことにより、所属組織をもたない看護職者が被災地での災害支援活動を展開するにあたり、どの

ようなプロセスを辿ることができるのかについて、具体的な提言につながることを期待され、公的な組織内の提言とは異なる視点で災害看護のあり方を検討することが可能となると思われる。

## 研究目的

本研究の目的は、東日本大震災直後から今日まで被災地での支援活動を試行錯誤しながら行っている A 県在住の施設を退職したベテラン看護職者の被災直後から今日までの支援活動の実際と、災害看護活動の場を開拓していくプロセス、活動を通しての思いを明らかにすることである。

## 研究方法

### 1. 調査対象

A 県内の内陸部に居住し、A 県内の病院を退職した看護職者で、東日本大震災直後から支援活動を行っている B ボランティアグループに所属し、研究協力の同意が得られた者、5名とした。

B ボランティアグループは、災害直後から避難所が閉鎖されるまで A 県看護協会の災害支援ナースとして活動していたが、災害支援ナースの派遣が終了となり、災害支援ナースとして活動していた者などが中心となり、他の仲間に活動を呼びかけ、内陸部に居住する看護職を退職した有志 11 名で結成された集団である。グループのメンバーは、A 県内各地で長年看護職として勤務した経験があり、さらに多くは管理職としての経験も有している。

### 2. 調査日

平成 24 年 (2012 年) 12 月 26 日。

### 3. 調査方法

グループインタビュー (以下、G.I.) には、「参加者の理解、感情、受け止め方、考えを引き出す」「ターゲットとなる人たちの形式ばらない集まり」などの要素があり、参加者と司会者だけでなく、参加者同士の間での相互作用も促進される<sup>7)</sup>とされている。そのため、今回は G.I. の形式を参考にインタビュー調査を行った。G.I. は研究協力者のプライバシーが守られる場所で行い、G.I. の内容は研究協力者の許可を得て IC レコーダーに録音し、併せて G.I. 中に研究者が印象に残った場面や感じたことを記すフィールドノートを作成した。なお、インタビューの総時間は 2 時間 20 分 43 秒であった。

## 4. 調査内容

### 1) 個別に聴取した内容

研究協力者の基本的属性として、年齢、性別、臨床経験年数とした。

### 2) G.I. の形式でのインタビュー調査の内容

災害支援活動のきっかけ、具体的な活動内容、災害看護活動の場を開拓していくプロセスと関わりを持った団体について、支援活動を通じて感じた被災者の変化、看護職者が行う災害支援活動について思うこと、とした。

## 5. 分析方法

インタビュー終了後、得られたデータとフィールドノートから直ちに逐語録を作成しデータとした。データを繰り返し読み、コード化し、類似している内容を共通性に沿ってカテゴリ化した。その後、時系列に沿って支援活動の実際とその活動に至るプロセス、活動を通しての思いを図式化した。それぞれの分類にあたっては、信頼性を高めるために研究者間で検討を重ねた。

## 6. 倫理的配慮

研究協力を依頼するにあたり、研究の協力は自由意思を前提としたものであり、協力を拒否しても何ら不利益を被ることはなく、協力した際も答えたくない項目・話したくない項目については答えなくてもよいこと、途中で辞めても何ら支障はないことを保障し、インタビューにより得たデータは本研究の目的以外で利用しないこと、研究協力者の匿名性を保障すること、研究で明らかになった事柄については学会等で発表する可能性があること、について口頭及び文書によって説明し、署名をもって同意を得た。さらに、長時間に及ぶインタビューであったため、インタビュー中は研究協力者の表情や態度、しぐさ等にも目を配り、負担をかけないように配慮した。そして、インタビュー内容を録音した IC レコーダーは、逐語録に文字化した時点で録音内容を消去した。また、文字化した電子ファイルの作業はネットワーク接続のないパソコンで行い、データは USB メモリに保存し、鍵のかかる収納場所で保管し、研究終了後は直ちに廃棄することとした。なお、本研究は岩手県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 結果

### 1. 研究協力者の属性

研究協力者 5 名は全員女性で、平均年齢は  $65.2 \pm 3.1$  歳、臨床経験年数は平均  $36 \pm 3.9$  年であった。

## 2. 災害看護活動の場を開拓するプロセスと意思

災害直後から災害看護活動の場を開拓するプロセスと、災害看護活動を通しての意思について説明する。

### 1) 災害直後から今日までの災害看護活動の場を開拓するプロセス (表1)

123 コードを得て、それらのコードを類似性で集約し、39 サブカテゴリ、10 カテゴリを見出した。

災害直後から災害看護活動の場を開拓するプロセスには大きく4つのフェーズがあり、それぞれの具体的なプロセスが把握できた。4つのフェーズとは『支援方法の模索』『C病院での活動』『D町避難所での活動』『D町仮設住宅での活動』である。災害直後から災害看護活動の場を開拓するプロセスは、【これまでのつながりを頼りに糸口を探す】から始まっていた。C病院が県にSOSを発信し、【災害支援ナースとして活動を開始する】という災害支援ナースとして活動することになり、【自衛隊と共に患者移送を担う】支援を行い、【これまでの看護師経験を活かした適切なアセスメントが認められる】体験をしていた。その後、災害支援ナースとしての活動場所がD町の避難所になり、【災害支援ナースとして避難所での活動を開始する】こととなった。それと並行し、県がA県看護協会に支援要請したことで、【県委託の健康調査を行い、保健師につなげる】ことをし、その後、避難所の閉鎖に伴い【災害支援ナースとしてではない活動を模索する】ことをしていた。しかし、他組織の介入やコンタクトの取り方などやりにくさが生じてきたため、【キーパーソンを探り、仮設住宅での活動を模索する】ことを続けながら、【キーパーソンとの絆を強くし、活動を本格化させる】ことになり、継続した活動を行っていくなかで、【コミュニティ作りを目指し、活動の充実を図る】に至っていた。

以下、各フェーズのカテゴリについて説明する。なお、コードを「 」, サブカテゴリを〈 〉, カテゴリを【 】 , フェーズを『 』で示す。

#### (1) 『支援方法の模索』

##### ① 【これまでのつながりを頼りに糸口を探す】

14 コードから7サブカテゴリを見出した。「情報が入ってこないため、動きたいが動き方が分からない」という〈何かしたいが動き方が分からない〉なか、「地震後元勤務先を訪れ、今後について自身が動けることを意思表示する」という〈元勤務先を訪れ、できることを探る〉ことを続けながら、「県立

病院は病院間で支援するという情報を聞く」など〈県立病院は病院間で支援するため、支援に入る隙間がないという情報を得る〉こととなった。その後、「私はいつでも支援に行けると仲間に発信する」など〈仲間に自分は何か支援ができると発信する〉なかで、「悶々としている時に何かやろうと仲間から連絡がある」という〈仲間から支援ができると連絡がくる〉ことで、「被災地にはガソリン不足で自分では動けない」という状況のなか、〈被災地に行く手段を探る〉ことや「A県看護協会に直接何かできないか訪れる」など〈思いついたA県看護協会に連絡をして支援を申し出る〉ことをしていた。

#### (2) 『C病院での活動』

##### ① 【災害支援ナースとして活動を開始する】

8コードから2サブカテゴリを見出した。「A県看護協会から支援の要請がある」や「自己完結で行く」など〈A県看護協会からの要請で災害支援ナースとしてC病院に向けて出発する〉ことをし、「水運びが重労働である」という〈水運びなど重労働も行う〉ことなど活動を開始していた。

##### ② 【自衛隊と共に患者移送を担う】

16コードから5サブカテゴリを見出した。「移送時は拠点病院のF病院に寄り、指示をもらう」など〈患者の移送にあたり、拠点病院の指示をもらう〉ことをしながら、「C病院から他院への患者の移送が始まる」や「患者を他院へ搬送するのを手伝う」など〈患者を他院へ移送するのを手伝う〉活動をした。その際、「行く場所が指示され自衛隊が搬送してくれた」や「自衛隊は搬送能力が大きい」など〈自衛隊の搬送能力の大きさを目の当たりにする〉、また、「自衛隊はG市を拠点に野営し、ジープで途中でも来て時間交代はしっかり守っている」や「自衛隊は力強い」など〈自衛隊の活動の仕方に感激しながら行う〉、さらに、「自衛隊には女性もいたり、被災された方などもいたことが分かった」など〈自衛隊の方と交流しながらの活動を行う〉ということをしていった。

##### ③ 【これまでの看護師経験を活かした適切なアセスメントが認められる】

12コードから4サブカテゴリを見出した。「受け入れ先の病院も相当混乱していることが分かってきた」ことや「受け入れ先の病院に何を申し送るか、担当していない患者について若い看護師には難しい」など〈情報不足で受け入れ病院も混乱している



なかで必要な情報を判断し、患者の申し送りをする>ことをしていた。そして、C病院において、「患者の状況を判断して搬送病院が決まる」など<重症患者の移送が始まる>ことで、「状況を丸ごと判断し患者の安全を守らなければならない」や「状況を丸ごと判断するのは若い人にはきつい」など<複数の患者の状況を丸ごと判断する必要がある>ことや、「処置や重症な患者を搬送するのに若い看護師では無理かな」と思い、自分が率先して付き添う」や「搬送に付き添って欲しいと頼まれるようになる」など<これまでの経験で培った判断力を求められ、重症患者の付き添いを任せられる>という体験をしていた。

### (3) 『D町避難所での活動』

#### ① 【災害支援ナースとして避難所での活動を開始する】

8コードから3サブカテゴリを見出した。現地へは「道路事情もあり、タクシーをチャーターして被災地に入る」という<タクシーを利用して行く>手段を取り、「4月初めから看護協会の災害支援ナースの派遣でD町の避難所に行く」などの<災害支援ナースとしてD町の避難所で活動をする>ことをしていた。そのため、「応援に行ったことで保健師が自宅に帰ることができる」という<現地スタッフが一時帰宅できる>こととなった。

#### ② 【県委託の健康調査を行い、保健師につなげる】

9コードから4サブカテゴリを見出した。「県が窓口で看護協会に依頼するが人集めに苦労している」や「県からOB保健師にも依頼があり、自分が行けるから伝えるように話す」という<健康調査を行うにあたり人員不足を知り、自分ができることを伝える>ことや、「自分の知っている看護職を紹介して支援をお願いする」など<自分たちでできないことは他者に紹介するなどつなぐ役割を果たす>ことをしていた。そして、「住民が仮設住宅に入居した後、E市及びD町の健康調査が始まる」や「県委託の健康調査を実施する」など<県委託の健康調査を行う>ことをし、「データ処理・データ整理まで調査した看護職者に依頼すればいいと思う」とE市の保健師に進言する」という<保健師に対し、健康調査後の対応等について進言する>ことをしていた。

### (4) 『D町仮設住宅での活動』

#### ① 【災害支援ナースとしてではない活動を模索する】

11コードから3サブカテゴリを見出した。「看護協会の災害支援ナースの派遣は避難所までである」など<避難所への災害支援ナースの派遣が終了する

ことが分かり、避難所の掃除の手伝いに行く>ことをした。また、「避難所で関わりのあったD町の保健師にできることはないか働きかける」など<自分たちにできることがないか、これまでの関わりの中から探し回る>という活動を続けながら、「最初は他の支援とダブらないよう、事前に連絡してもらうなど訪問の調整をしてもらう」ことや、「小さい仮設が多くあり、集会所2箇所くらいを時間で回る」など<役場が調整してくれたところで活動を始める>ということをしていった。

#### ② 【キーパーソンを探り、仮設住宅での活動を模索する】

12コードから3サブカテゴリを見出した。「支援していた避難所の近くに仮設住宅ができた」ため、「町の依頼ではなく押しかけみたいなものである」などという状況の中、<仮設住宅に隣接してできた集会所に押しかけのようにとにかく行ってみる>ことをしていた。その際、「仮設住宅で活動するのに調整してくれそうな人を見つける」や「元看護師が調整してくれる仮設住宅を拠点にした活動ができるか探る」など<避難所で支援をしていた時に知り合った人のなかから調整役を見つける>ことをしながら、「継続できるかどうかは分からない状況である」ことや「9月からつなぎをし始め、月1回のペースで活動する」など<継続できるかわからない状況の中で月1回ペースでの活動を開始する>ということをしていった。

#### ③ 【キーパーソンとの絆を強くし、活動を本格化させる】

19コードから4サブカテゴリを見出した。D町の仮設住宅に住む住民の中で「調整してくれる人がキーパーソン」や「調整してくれる人がいるから安心できる」など<調整役とつながり、関わりをもっていく>ということをし、集会所で開催するサロン活動の際、「話の中で次回何にしようかヒントをもらう」や「健康への支援がもともとある」など<プログラムは集まった参加者の興味がありそうなもの、興味をもてるものにする>という工夫をしていた。また、サロンのプログラムを作成するにあたり、「柄の実を拾って配ったものを毎日続けている」などといった<身近なものを取り入れる>ことや、「プログラムを考えていたら、ロコモが目に入った」や「ラジオ体操は結構疲れる」などの<自身の経験等も活用し、気軽に取り組めるプログラムを実践する>ということもしていた。

表1. 災害直後から今日までの災害看護活動の場を開拓するプロセス

フェーズ	カテゴリ	サブカテゴリ
支援方法の模索	これまでのつながりを頼りに糸口を探す	何かしたいが動き方が分からない
		元勤務先を訪れ、できることを探る
		県立病院は病院間で支援するため、支援に入る隙間がないという情報を得る
		仲間に自分は何か支援ができると発信する
		仲間から支援ができると連絡がくる
		被災地に行く手段を探る
C病院での活動	災害支援ナースとして活動を開始する	A県看護協会からの要請で災害支援ナースとしてC病院に向けて出発する
		水運びなど重労働も行う
		患者の移送にあたり、拠点病院の指示をもらう
	自衛隊と共に患者移送を担う	患者を他院へ移送するのを手伝う
		自衛隊の搬送能力の大きさを目の当たりにする
		自衛隊の活動の仕方に感激しながら行う
		自衛隊の方と交流しながらの活動を行う
	これまでの看護師経験を活かした適切なアセスメントが認められる	情報不足で受け入れ病院も混乱しているなかで必要な情報を判断し、患者の申し送りをする
		重症患者の移送が始まる
		複数の患者の状況を丸ごと判断する必要がある
		これまでの経験で培った判断力を求められ、重症患者の付き添いを任せられる
		タクシーを利用して行く
D町避難所での活動	災害支援ナースとして避難所での活動を開始する	災害支援ナースとしてD町の避難所で活動をする
		現地スタッフが一時帰宅できる
		健康調査を行うにあたり人員不足を知り、自分ができると伝える
	県委託の健康調査を行い、保健師につなげる	自分たちでできないことは他者に紹介するなどつなぐ役割を果たす
		県委託の健康調査を行う
		保健師に対し、健康調査後の対応等について進言する
D町仮設住宅での活動	災害支援ナースとしてではない活動を模索する	避難所への災害支援ナースの派遣が終了することが分かり、避難所の掃除の手伝いに行く
		自分たちにはできないことがないか、これまでの関わりの中から探し回る
		役場が調整してくれたところで活動を始める
	キーパーソンを探り、仮設住宅での活動を模索する	仮設住宅に隣接してできた集会所に押しかけのようになにかか行ってみる
		避難所で支援をしていた時に知り合った人のなかから調整役を見つける
		継続できるかわからない状況の中で月1回ペースでの活動を開始する
	キーパーソンとの絆を強くし、活動を本格化させる	調整役とつながり、関わりをもっていく
		プログラムは集まった参加者の興味がありそうなもの、興味をもてるものにする
		身近なものを取り入れる
		自身の経験等も活用し、気軽に取り組めるプログラムを実践する
コミュニティ作りを目指し、活動の充実を図る	参加者のつながりづくりも視野に入れた活動をする	
	集まった人たちが自由にできる場を提供する	
	自分たちを知ってもらい、住民とつながりを作る	
		同じ仮設住宅の枠を超えてコミュニティづくりに貢献する

④【コミュニティ作りを目指し、活動の充実を図る】

14コードから4サブカテゴリを見出した。D町の仮設住宅で継続した支援をしていくなかで「一人ではやらないが、みんなでやることでつながりを強めるきっかけになる」などの「参加者のつながりづくりも視野に入れた活動をする」ことや「集まった方々は情報交換の場にもしている」などと集まった人たちが自由にできる場を提供すること、「自分たちのことを知ってもらいたい」という「自分たちを知ってもらい、住民とつながりを作る」こと、さらには「集まることによって彼女たちのつながりが、コミュニティが強くなっているかなって感じ」や「自分たちは意識していなかったが、他の人からコミュニティづくりにも貢献しているのではないかと」言われた、「よその仮設住宅の人も来ており、もともとのつながりだけではない」などと「同じ仮設住宅

の枠を超えてコミュニティづくりに貢献する」という活動をし、活動を充実させていた。

2) 災害支援活動を通しての思い (表2)

79コードを得て、それらのコードを類似性で集約し、24サブカテゴリ、8カテゴリを見出した。災害支援活動を通しての思いは、災害直後、【沿岸部の仲間が心配、自分でも何かできるはず】という思いを抱き、自分にできることを模索していた。災害支援ナースとしての活動や県委託の健康調査を実施してみて、【県内者の自分たちが活動するのは意味がある】や【被災地の保健師への気遣い】を感じていた。また、県委託の健康調査を行った際、【支援後の自分の気持ちの落ち場所が見つからない】と感じていた。その後、自分たちにはできる活動を模索するが、他組織の介入やコンタクトの取り方などやりにくさが生じ、【継続した支援をしたい】という思

いを抱いていた。そして、D町の仮設住宅で活動を模索するなか、【やりたい気持ちと無理かもという気持ち】を抱いていた。その後、これまでの活動を通して、【住民の反応から得る手ごたえ】を感じるると同時に、【メンバーや家族の支えがあってこそ活動ができる】という思いを抱いていた。

(1) 【沿岸部の仲間が心配、自分でも何かできるはず】

7コードから4サブカテゴリを見出した。災害発生直後、「看護職って何ができるんだろう」など<看護職に何かできることはないか>やとにかく「沿岸部の仲間、過去と一緒に働いた仲間のことが気になる」という<昔の仲間のことが心配>という思いを抱くと同時に、「退職したOBが多くいるから何かできるはず」という<退職した仲間でも何かできるはず>、「医療局は組織ができるから大丈夫だろう」と思い、県立病院に応援に行くという考えには至らなかった」という<県の医療局は組織だからきっと大丈夫>といった思いがあった。

(2) 【県内者の自分たちが活動するのは意味がある】

3コードから1サブカテゴリを見出した。「災害支援ナースは県外者が多く、県内者で喜ばれた」や「避難所でも県外者の看護師が多く、県内者の自分たちが行く意味がある」など<災害支援ナースは県外者が多く、県内者の自分たちが活動する意味がある>という思いを抱いていた。

(3) 【被災地の保健師への気遣い】

21コードから5サブカテゴリを見出した。「被災地の保健師は様々な応援が来る度にオリエンテーションをしている」ことなどから<保健師の負担を減らせないか>や、「保健師が全てをこなすのは時間が勿体ない」や「スタッフ自身の後方支援ができると思う、少し自分のことも労わって休んで欲しい」など<保健師はもっと自分たちに頼ってもいい、少し休んで欲しい>という思いを抱いていた。また、「これまでの経験で物事を見ることができ、また考えることができると思う」や「過去の職位で外に出ていないため、臨機応変に対応できる」など<自分たちはこれまでの経験から物事を客観視できるため、頼まれても大丈夫>と思っていた。しかし一方で、「保健師は支援を依頼するとなるとその前後の段取りが必要になる」ことや「人が入れば煩わしいと思うかもしれない」など<手伝ってもらおうことでの煩わしさもあるかもしれない>と感じていた。そして、「いざという時に頼む業務、自分たち

がこなす業務を組み立てておくことが必要だろう」などの<いざという時に備え、平時から業務の整理をしておくといい>と感じていた。

(4) 【支援後の自分の気持ちの落ち場所が見つからない】

2コードから1サブカテゴリを見出した。「県委託の健康調査は1回きりのため、気になる人のことをいつまでも引きずってしまう」ことや「健康調査のデータが置きっ放しにされ活用されていない感じがして、気になる人が余計に気になるような気がする」という<健康調査を通じて感じた支援する側の気持ちの落ち場所が見つからず引きずってしまう>という思いを抱いていた。

(5) 【継続した支援をしたい】

8コードから2サブカテゴリを見出した。自分たちにできる活動を模索するなか、役場など「調整してもらった場所は同一ではない」状況で、「行くところそれぞれで気になる人がいる」という<調整してくれる場所は同一ではなく、行くところどころで気になる人がいる>と感ずると同時に、「他組織の介入やコンタクトの取り方などでやりにくさがある」なかで、「1回きりで終わりというのは心もとない」など<調整してくれるところで活動を始めるが、1回きりの活動ではつながりを作れない>と感ずっていた。

(6) 【やりたい気持ちと無理かもという気持ち】

9コードから3サブカテゴリを見出した。「避難所への災害支援ナースの派遣が終わり聞いて、その後が気になった」ことや「災害支援ナースの派遣が終了するからと言って、それで終わりではないな」など<災害支援ナースの派遣が終了した後が気になる>という思いがあり、「何か自分たちにできることはないか」や「無理かもしれない」など<何かできることはないか、何もしないでいられない、しかし無理かもしれない>という思いを抱いていた。そして、「馴染みのある避難所のところで少し関わることはできないか」や「継続して行きたいという思いが強く、細いつながりのところから手繰り寄せる」など<馴染みのあるところをつながりを作り、継続した活動がしたい>という思いを抱いていた。

(7) 【住民の反応から得る手ごたえ】

20コードから5サブカテゴリを見出した。これまでのD町の仮設住宅での活動を振り返り、「自分たちが伝えたことを継続している」ことや「住民が



表2.災害支援活動を通しての思い

カテゴリ	サブカテゴリ
沿岸部の仲間が心配、自分でも何かできるはず	看護職に何かできることはないか
	昔の仲間のことが心配
	退職した仲間でも何かできるはず
	県の医療局は組織だからきっと大丈夫
県内者の自分たちが活動するのは意味がある	災害支援ナースは県外者が多く、県内者の自分たちが活動する意味がある
被災地の保健師への気遣い	保健師の負担を減らせないか
	保健師はもっと自分たちに頼ってもいい、少し休んで欲しい
	自分たちはこれまでの経験から物事を客観視ができるため、頼まれても大丈夫
	手伝ってもらったことでの煩わしさもあるかもしれない
	いざという時に備え、平時から業務の整理をしておくの良い
支援後の自分の気持ちの落ち場所が見つからない	健康調査を通じて感じた支援する側の気持ちの落ち場所が見つからず引きずってしまう
継続した支援をしたい	調整してくれる場所は同一ではなく、行くところどころで気になる人がいる
	調整してくれるところで活動を始めるが、1回きりの活動ではつながりを作れない
やりたい気持ちと無理かもという気持ち	災害支援ナースの派遣が終了した後が気になる
	何かできることはないか、何もしないでいられない、しかし無理かもしれない
	馴染みのあるところとつながりを作り、継続した活動がしたい
住民の反応から得る手ごたえ	自分たちが伝えたことを継続してくれて嬉しい
	自分たちを待っていてくれて嬉しい
	住民が震災当初の話など自分たちの前でも話せるようになってきた
	住民と気持ちが通じ合うようになった
	住民が自分たちに急に気遣いをしていない
メンバーや家族の支えがあってこそ活動ができる	相互の助け合いで活動できている
	相互の励まし合いで活動できている
	ボランティア活動をする自分を快く送り出してくれる家族に感謝する

継続してくれているのはつながりということである」など自分たちが伝えたことを継続してくれて嬉しい>や、「住民が待っていてくれるのが分かる」など自分たちを待っていてくれて嬉しい>と感じていた。そして、「住民は関わって1年を経過する頃に被災当時の話を自分たちのいるところで話せるようになってきた」ことや「住民の中にはそれぞれ自分より大変な人がいるから話してはいけないという気持ちがあったようだった」など<住民が震災当初の話など自分たちの前でも話せるようになってきた>、また、「住民の気持ちが他者に向いてきた」ことや「サロン活動終了後の掃除なども手伝ってくれるようになった」ことなど<住民と気持ちが通じ合うようになった>、「行事がある時などは準備や後始末を外部の支援団体に指示されることなどの愚痴を話すようになった」ことなど<住民が自分たちに急に気遣いをしていない>と感じていた。

(8)【メンバーや家族の支えがあってこそ活動ができる】

9コードから3サブカテゴリを見出した。災害発

生直後からの自分たちの災害支援活動を振り返り、「被災地は遠隔地のため、車に同乗しないと行くことができなかったこと」や「運転者に負担をかけてしまう」など<相互の助け合いで活動できている>と感じ、また、「お互いの熱意に引っ張られている」など<相互の励まし合いで活動できている>と感じていた。そして、「家のことは心配しないで行ってきて、と家族が背中を押した」や「家族の協力が無いとできない」など<ボランティア活動をする自分を快く送り出してくれる家族に感謝する>という思いを抱いていた。

3) 災害看護活動の場を開拓するプロセスと思い (図1)

災害看護活動の場を開拓するプロセスと思いの関連性を図1に示す。

考察

1. 所属施設を持たないベテラン看護職者が開拓していく災害支援活動について  
研究協力者が被災地での災害支援活動を行う最初の

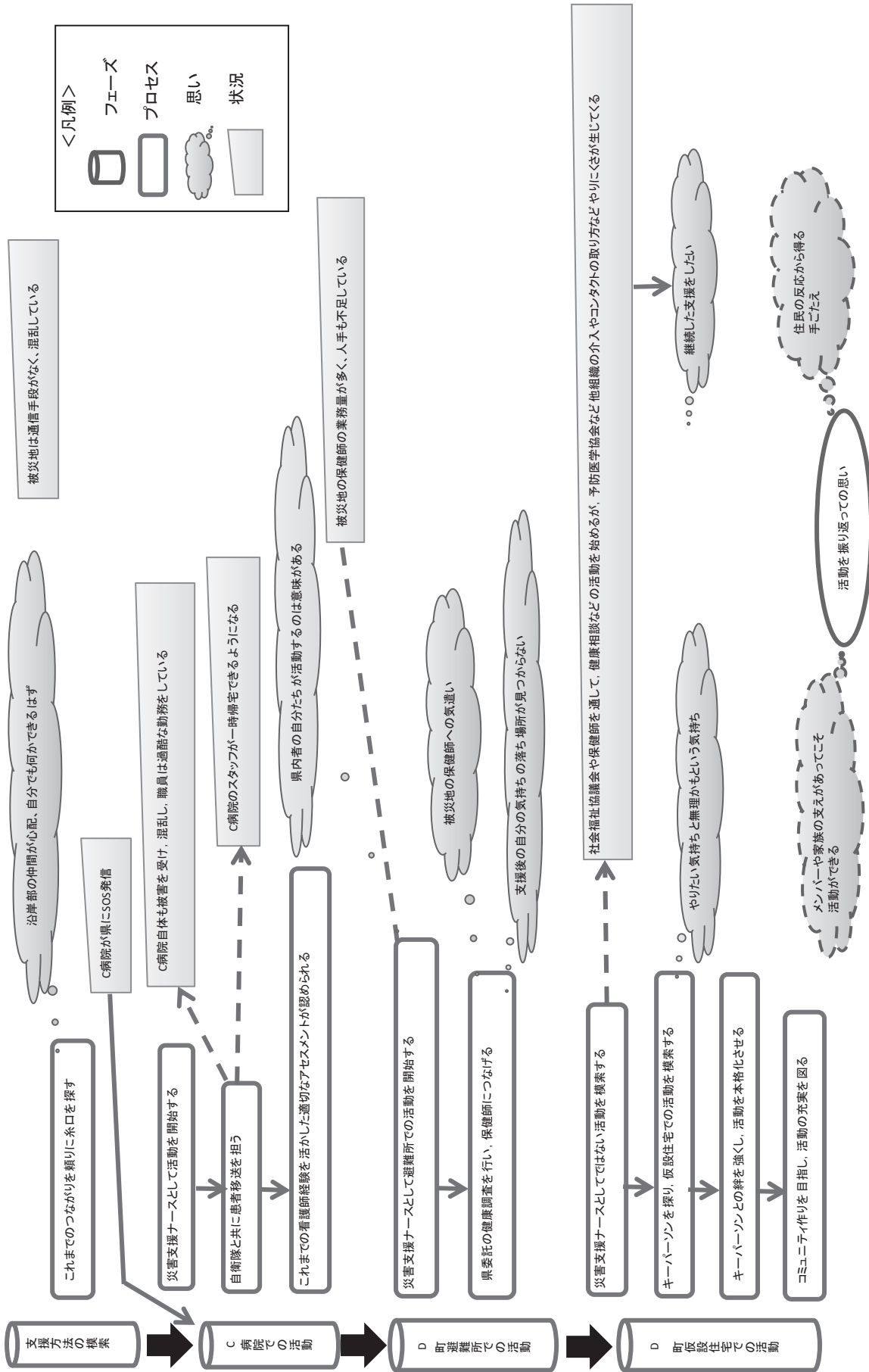


図1.災害看護活動の場を開拓するプロセスとしたい



フェーズは【沿岸部の仲間が心配、自分でも何かできるはず】という思いで、【これまでのつながりを頼りに糸口を探す】という『支援方法の模索』であった。次のフェーズは【災害支援ナースとして活動を開始する】などの『C 病院での活動』で、自分に課せられた範囲でできることをしていた。そして、【災害支援ナースとして避難所での活動を開始する】など『D 町避難所での活動』というフェーズのなかで、【被災地の保健師への気遣い】を感じたり、【支援後の自分の気持ちの落ち場所が見つからない】と感じ、様々な迷いや葛藤の中にいたと言える。この期間を通して、被災住民に対する健康支援のあり方を思案し、公的な手段ではなく有志による活動へと転換させることになり、『D 町仮設住宅での活動』のフェーズに移っていた。このフェーズのなかで、【キーパーソンを探り、仮設住宅での活動を模索する】ことなどで、【やりたい気持ちと無理かもという気持ち】を抱きながらも何とか自分たちが活動する場所を体当たりに探し、【キーパーソンとの絆を強くし、活動を本格化させる】ことや【コミュニティ作りを目指し、活動の充実を図る】に至っていた。これには相当の労力が必要であったと考えられ、これらの活動の根底には看護職としての使命感のようなものを強く認識していたものと推察される。

災害直後は県内外から看護職に限らず、あらゆる面において組織的に多数の応援が入り、様々な支援活動が行われた。組織を持たない者の多くは何かしたいという思いで、短期間のボランティアとして被災地に入る者が多かった。しかし、同時に災害後まもない混乱期には様々なボランティアが入ることで、営利目的の団体による身勝手な支援活動の展開により被災地に住む住民とのニーズのすれ違いの発生などのトラブルが発生するという事態も生じ、それらボランティア等の支援の受け入れ先である行政や社会福祉協議会において、受け入れる際にその所属が信用のおける団体であるかの線引きがあったと思われる。このような状況の中で、所属を持たない任意の団体が看護を入口として、中長期の継続した活動を行いたいという思いを抱いても支援の受け入れ先の信頼を得るには困難を極めたと推察される。その一方、中長期の時期における被災地の現状として、被災者は慣れない避難所での生活により、心身に大きな負担がかかるほか、食生活の乱れ、先行きへの不安、避難生活が長期に渡ることでの活動の不活発さなど、健康を害する要素が数多く存在する。避難所等で看護専門職者が行う活動は、被災者

の身近な存在として生活支援を中心とした衣・食・住、そして医療を提供することで、避難生活から予測される健康問題に対し、専門的看護知識・技術の提供を積極的に行っていくこと<sup>8)</sup>が求められ、何らかの疾患を有している者への支援は勿論、健康を害していない者に対しても予防的な視点で健康維持・増進に向けた支援を展開することは非常に重要である。つまり、顕在している問題だけでなく潜在している問題に対してもじっくりと時間をかけ、住民との関係性を築きながら解決を目指すことが必要だと考える。そして、避難所において看護職が自らの手・目・心・耳・口を使って、いかに被災者に寄り添うことができるかが重要である<sup>9)</sup>とされ、研究協力者は看護という高い専門性と深い関係性を構築できる能力をもつベテラン看護職であり、今回、そのような活動の展開についての方策を考える基礎資料を得ることができたと考えられる。

さらに、今回の研究協力者は長年、A 県内各地の保健・医療機関を中心に勤務した経験を有しており、風土を熟知した者が被災地において災害看護活動を展開することで、被災者に対し、安心を与えることにもつながったと考えられる。これは研究協力者へのインタビューの中で、“災害支援ナースとして来るのは多くが関東・関西からで、やっと県内の人が来たって喜ばれた”という語りがあり、【県内者の自分たちが活動するのは意味がある】という思いを抱いていたことからとも言える。過去に勤務した沿岸部の病院のこと、共に働いた看護職の仲間の安否が気になるなかで、ひとつの活動の場を見出すことにつながったことは大きな成果で、【継続した支援をしたい】という思いのなかで妥協することなく、自分たちの支援に対する姿勢を大切に活動を行ったことは大きな意味があったと考える。

## 2. ベテラン看護職者が強みを生かし、災害看護活動の場を開拓することについて

今回の研究協力者は長年、A 県内各地の医療機関を中心に勤務した経験を有し、さらに管理職としての経験も兼ね備えていたことから、幅広い知識と技術に加え、必要時、冷静で適切な状況判断が可能であった。ベナーは、達人ナースについて、状況を理解して適切な行動と結びつけていく際に分析的な原則には頼らないこと、背後に豊富な経験があるため、不経済な検討をせず、状況を直観的に把握し、問題領域に正確にねらいを定めることができる<sup>10)</sup>としている。今回の結果において、C 病院での<複数の患者の状況を丸ごと

判断する必要がある>や<これまでの経験で培った判断力を求められ、重症患者の付き添いを任せられる>という【これまでの看護師経験を活かした適切なアセスメントが認められる】ということにつながったことは、まさに達人ナースと言える活動であったと考えられる。また、「これまでの経験で物事を見ることができ、また考えることができると思う」や「管理職経験者は目配りができたり、視野の広がりの中で判断ができる立場である」などの<自分たちはこれまでの経験から物事を客観視できるため、頼まれても大丈夫>という思いにも通ずるものと考えられる。被災地の行政や施設などの声では様々な団体が応援に入っていたが、各団体の調整に苦慮したというものがあつた。今回、研究協力者は状況を見てアセスメントし、待つことや専門性を生かすことが可能であり、豊富な経験などから染み付いた裁量を遺憾なく発揮し、このことが災害看護活動の場を開拓していくこととなり、ベテラン看護職者の強みを活かした活動ができたものと言える。

また、今回の災害看護活動は【これまでのつながりを頼りに糸口を探す】ことから始まり、<自衛隊の方と交流しながらの活動を行う>ことや<自分たちにできることはないか、これまでの関わりの中から探し回る>など、人と人とのつながりやネットワークを大切にしながら活動していることが分かる。このことは【キーパーソンを探り、仮設住宅での活動を模索する】ことや活動をしていくなかで【キーパーソンとの絆を強くし、活動を本格化させる】こと、また住民の【コミュニティ作りを目指し、活動の充実を図る】ことにも結びついていると言え、長年の対人支援の経験を生かし、何気ない他者との関わりから支援につなげるということであるとも考えられる。

そして、D町の仮設住宅の集会所で開催したサロン活動のプログラムには、<身近なものを取り入れる>ことや<自身の経験等も活用し、気軽に取り組めるプログラムを実践する>活動をしていた。具体的には、近年注目されるようになり、厚生労働省が新たに策定した健康づくりのための身体活動基準 2013<sup>11)</sup>にも示されているロコモティブシンドロームを予防するためのプログラムを作成したり、料理や手芸など、住民のニーズに合うような工夫がされていた。研究協力者は個々の住民と関わりをもち、身体面、精神面、時に社会面での支援をしつつ、住民自身がセルフケアの促進を行えるような関わりをもち、支援を行っていたと考えら

れる。看護職の支援活動の原点は、どのような状況下であっても、その人らしさを尊重し、その人の価値観を重んじながら、その人らしく生き切っていただくために、きめ細やかな目配り・気配りをしながら支援することが大切である<sup>12)</sup>とされるが、まさに実践されていたと考えられる。そして、<参加者のつながりづくりも視野に入れた活動をする>や<集まった人たちが自由にできる場を提供する>、<同じ仮設住宅の枠を超えてコミュニティづくりに貢献する>活動は、被災によって失われたコミュニティの再生に向けた地域づくりの足がかりになったと考えられる。

さらに、研究協力者らは既に現役を退いているため、時間的な制約も少なく、ある程度自由さの中で活動ができることも大きな強みであると考えられる。そしてこれは、災害直後から災害看護活動を行うことに理解を示してくれる家族の存在があつたことが大きく、このことは<ボランティア活動をする自分を快く送り出してくれる家族に感謝する>ということからも伺える。

これまで中長期における被災地の人々の健康の保持増進、悪化予防のための支援は、充分とは言えない状況で、支援する場合も組織的な介入が求められる傾向にあつた。しかし、今回、研究協力者らはマニュアルなどに頼るのではなく、これまでの経験知から被災地に暮らす住民と協働し、被災者に寄り添う支援者として、時にはひとりの人として、自分たちならではの新しい災害看護活動の道を切り開いていたと言える。つまり、ベテラン看護職者ゆえの強みが、新たな災害看護活動の形を導いてくれたと考えられる。

### 3. 今後の活動への示唆

組織を持たない上、被災地ではない内陸部に居住する看護職者が試行錯誤を繰り返し、様々な思いを抱きながらも自身の気持ちの落ち場所を見つけ、継続的に関わるプロセスを見出したことは今後の活動の糸口になると考える。組織を持たない者の災害看護活動のプロセスとして、一概にその過程を組み立てることはできないが、枠組みに囚われず、自分たちの活動の方向性を見失わず、<相互の助け合いで活動できている>ことが大きな力となっていたと考えられる。

【やりたい気持ちと無理かもという気持ち】のなかでも継続した活動をすることができたのは、住民と共に一緒にできることを考え、楽しくをモットーとした活動を行った成果であると考えられる。このことは、これまでの自分たちの活動を振り返り、【住民の反応から

得る手ごたえ】を感じる事ができたことからとも言える。組織の中で活動することは、物理的なことも含めて、何らかの活動をする際にある程度の基盤が整備されているというプラス面がある一方、様々な制約が生じ、自由さが得られにくいことが考えられる。そのため、ある程度自由に活動できるという強みや自分たちが本当に取り組みたい災害看護活動を行うためには、先にも述べたベテラン看護職ならではの強みを大いに活かし、かつ、必要時に他組織・多職種とつながりを持つておくようにしておくことが求められていると考える。

### 研究の限界と今後の課題

本研究の研究協力者はこれまでの自分たちのつながりの中で、有志が集い、その中で試行錯誤の中、災害看護活動を行ってきた。そのため、今回明らかにしたプロセスを一般化するのは限界がある。よって、組織を持たない看護職者が被災地において災害看護活動を開拓する際のひとつのプロセスについて、調整する役割を担う部署を確立させたり、自由度を持ちながらも一定の枠組みで活動展開ができるような仕組みづくりをしていくことが今後の課題である。また、看護職者だけで災害看護活動を展開していくことには限界があるため、他組織・多職種とつながりを持ち、息の長い活動が可能な仕組みづくりも求められる。

### 結論

本研究は組織を持たないベテラン看護職者が、東日本大震災の被災地において、発災直後から今日までどのようなプロセスで支援活動を開拓したか、また、支援活動を通しての思いを明らかにすることを目的とした。研究協力者へのインタビューから以下のことが明らかとなった。

1. 災害直後から今日までの被災地での災害看護活動の場を開拓するプロセスは、『支援方法の模索』のフェーズでは【これまでのつながりを頼りに糸口を探す】で、『C 病院での活動』のフェーズでは【災害支援ナースとして活動を開始する】、【自衛隊と共に患者移送を担う】、【これまでの看護師経験を活かした適切なアセスメントが認められる】で、『D 町避難所での活動』のフェーズでは【災害支援ナースとして避難所での活動を開始する】、【県委託の健康調査を行い、保健師につなげる】で、『D 町仮設住宅での活動』のフェーズでは【災害支援ナースとしてではない活動を模索する】、【キーパーソンを探り、仮設住宅での

活動を模索する】、【キーパーソンとの絆を強くし、活動を本格化させる】、【コミュニティ作りを目指し、活動の充実を図る】であった。

2. 災害看護活動を通しての思いには、【沿岸部の仲間が心配、自分でも何かできるはず】、【県内者の自分たちが活動するのは意味がある】、【被災地の保健師への気遣い】、【支援後の自分の気持ちの落ち場所が見つからない】、【継続した支援をしたい】、【やりたい気持ちと無理かもという気持ち】、【住民の反応から得る手ごたえ】、【メンバーや家族の支えがあってこそ活動ができる】があった。
3. 所属施設を持たないベテラン看護職者による災害支援活動は、これまで築いてきた人とのつながりや経験を生かし、活動できる場所や活動方法を模索し、様々な思いを抱きながらも自身の気持ちの落ち場所を見つけ、自分たちの活動の方向性を見失わずに活動していた。
4. ベテラン看護師が災害看護活動を行うことは、幅広い知識と技術、冷静で適切な状況判断などが可能になると考えられ、さらに被災地の風土を熟知した看護職者が災害看護活動を行うことで被災者に安心を与えることにつながったと示唆された。

### 謝辞

本研究を行うにあたり、インタビューにご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、日本災害看護学会第 15 回年次大会（2013 年、札幌）で報告した。

### 文献

- 1) 山田覚, 草間朋子, 酒井明子, 渡邊智恵, 小原真理子, 他. 特集 東日本大震災. 日本災害看護学会誌 2011; 12 (3) : 6-36.
- 2) 日本赤十字社. 東日本大震災: 日本赤十字社の活動. 日本赤十字社; 2013 年 9 月.  
<http://www.jrc.or.jp/shinsai2011/index.html>.
- 3) 公益社団法人日本看護協会. 東日本大震災復興支援事業: 東日本大震災における日本看護協会の取り組み. 公益社団法人日本看護協会; 2012 年 5 月 31 日.  
<http://www.nurse.or.jp/home/saigai/hokoku/index.html>.
- 4) 土屋厚子, 川田敦子. 静岡県の初動体制と仙台市および岩手県での保健師活動「助かった命を守る」ための組織的支援. 保健師ジャーナル 2011; 67 (9) :



- 760-764.
- 5) 兼田昭子, 村山和子, 吉田きよみ, 小野寺正子, 平澤智子, 他. ルポ・そのとき看護は ナース発東日本大震災レポート. 第1版. 東京都: 日本看護協会出版会; 2011.
- 6) 小原真理子, 谷岸悦子, 木村拓郎, 齋藤美喜, 金田正樹, 他. いのちとこころを救う災害看護. 第1版. 東京都: 学研メディカル秀潤社; 2008.
- 7) S. ヴォーン, J・S・シューム, Jシナグブ. グループ・インタビューの技法. 第1版. 井下理, 田部井潤, 柴原宜幸. 東京都: 慶應義塾大学出版会; 1999. 7-10.
- 8) 前掲6)
- 9) 黒田裕子, 神崎初美. 事例を通して学ぶ避難所・仮設住宅の看護ケア. 第1版. 東京都: 日本看護協会出版会; 2012.
- 10) パトリシア ベナー. ベナー看護論達人ナースの卓越性とパワー. 第1版. 井部俊子, 井村真澄, 上泉和子. 東京都: 医学書院; 1992. 22-25.
- 11) 厚生労働省. 健康づくりのための身体活動基準 2013: 運動基準・運動指針の改定に関する検討会報告書. 厚生労働省; 2013年3月.  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002xppl-att/2r9852000002xpqt.pdf>
- 12) 前掲9)
- (2014年1月20日受付, 2014年2月25日受理)



〈Research Report〉

## Development of Disaster Nursing Activities by Experienced Nurses Not Associated with Facilities in Prefecture A and the Sentiments Raised by these Activities

Ayaka Sobu , Mayumi Miura , Natsuko Kakizaki , Akihiko Hirano , Kyoko Noguchi ,  
Mikiko Taguchi , Yukie Watanabe  
Iwate Prefectural University, Faculty of Nursing

**Keywords:** experienced nurse, disaster nursing activity, development, process, sentiment